

鎮源『法華驗記』における經典の扱い

——『法華經』以外の經典を中心に——

岡 田 文 弘

一 問題の所在

平安時代の説話集である鎮源『法華驗記』（以下『驗記』）は、その題名に明らかなように『法華經』にまつわる靈驗譚を集成したものであり、当時の法華信仰の一端を示す史料として、また日本における『法華經』受容史を考える上で、重視・珍重されてきた文献である。従つて従来の研究の殆どが、經典信仰の側面において同書を論考する場合、その主軸を当然『法華經』に置いてきた。

しかし同書には、『法華經』以外の經典（以下「余經」）についても、少なからぬ言及がなされている。それらは否定的に扱われることもままあるが、時には比較的肯定されることもあり、また兼修を勧めるものもあるなど、意外なほど多様な取り上げられ方をしている。

そこで、『法華經』説話集たる『驗記』について、敢えて『法華經』以外の經典が取り上げられる箇所注目し、これ

によつて逆に同書の持つ經典信仰の様相を浮き彫りにせんと試みるものが、本研究の目的である。

二 般若經典、『華嚴經』、『金光明最勝王經』について

まず、本書で言及される余經の中で着目すべきは、般若經典、『華嚴經』、そして『金光明最勝王經』（以下『最勝王經』）であろう。これらの經典については、その持者の靈驗と法華持經者の靈驗とが比較される、という類型の一連の説話（いわば「行者対決説話」）が収載されている。以下に挙げる三話がこれに該当する。⁽¹⁾

- ・ 第一七話「持法沙門持金法師」（対『金剛般若經』行者）
- ・ 第三三話「雲州法嚴蓮藏二法師」（対『華嚴經』行者）
- ・ 第四八話「光勝沙門法蓮法師」（対『最勝王經』行者）

このうち第一七話および第三三話については、既に岡田二〇一六において取り上げ、そこから敷衍して、本書における般若經典、『華嚴經』と『法華經』の比較がいかに為され

ているかについて論じている。この論を基に適宜補足しつつ、両經の『驗記』における位置づけを確認するところから、考察を始めた。

まず般若經典については、『驗記』（ひいては編者・鎮源）はこれを軽視している可能性が伺える。

まず、法華持者と『金剛般若經』持者の対比を描く第一七話においては、般若持者の持金法師は品性の卑しい人物として描写され（「以邪念心如是作謗」『日思』五二一頁上）、また彼の持する『金剛般若經』も話中で全く靈驗を発揮しないまま終わる（「雖誦誦金剛般若、未逮顯現般若法利」『日思』五二二頁上）。このような般若經の持者およびそれ自体に対する扱いは、次に述べる『華嚴經』の扱いと比較すると、否定的なものであると言える。

これと関連して見るべきは、第一〇六話「伊賀国報恩善男」である。同話は、その並行話（日本靈異記）中一五、『三寶經』中二（一）等）がおしなべて『般若心經』陀羅尼の功德を述べているにも関わらず、同話のみこれを述べていない。⁽²⁾

このように本書は般若經典についてはしばしば否定的な態度を示している。⁽³⁾

一方、『華嚴經』については、肯定的に扱われている。

まず第三三話において華嚴經者の法嚴が登場するが、彼は同じく主人公格として登場する法華持者・蓮藏の良き友人と

して肯定的に描かれている。また法嚴は、華嚴經受持の功德によって一定の靈驗（善神の給仕）を見せている。これは前述の、第一七話での般若持者（持金）が品性卑しく描写され、かつ般若經の靈驗が一切起きていないとされている展開とは対照的である。⁽⁴⁾

さらに付言すると、第九八話「比丘尼舍利」では、主人公の舍利菩薩を賞賛するエピソードの一として、彼女が『華嚴經』の講会で活躍した逸話を、説話後半において紹介している。これは先行話（日本靈異記・三寶經）収載⁽⁵⁾にも見られるものだが、鎮源がこれを削除することなく、しかも改変（例えば、『華嚴經』の講会を『法華經』の講会に変えるといった）することなく継承しているという点は着目すべきであろう。先述の、先行話における般若心經の功德についての記述を継承しなかった第一〇六話とは対照的な作意と言えるからである。

このように本書は般若經典を軽視する一方で、『華嚴經』を肯定的に捉える姿勢を見せている。これは天台の五時八教説が根底にあるためと推察される（化儀の四教では、『華嚴經』一教を「頓教」とする一方、『般若經』は他教とともに「漸教」に摂せられる。かつ化法の四教では『華嚴經』は円教に別教を兼ねるとするが、『般若經』は別・円二教に加え、更に粗い通経を帯びているとする）岡田二〇一六、一四八頁上）。

これら般若・華嚴の二經に対し、『最勝王經』については、

第四八話において取り上げられ、その靈驗が『法華經』のそれと比較されている。ただ同話は、前述の第一七話（般若經）との比較）及び第三三話（華嚴經）との比較）とは、明らかに異なる性質をそなえた説話となっている。

第一七話・第三三話は、「いつも行者に食事を給仕していた神格が、それを中止した」という事件を契機とし、両者の功德の実態が明かされる、という共通したストーリーの骨子を持っており、これは『觀世音應驗記』収載の説話「釈發正」（僧詳『法華伝記』巻第六誦勝利第八之四、義寂『法華經集驗記』上一五に同文話）をその原型に持つものである。⁽⁶⁾

これに対し、第四八話は「靈驗によって米作りをし、その収穫量を競う」（「各作一町之田、依米穀勝劣、可知二經驗力」『日思』五三四頁下―五三五頁上）という、類似しつつも内実は大いに異なる筋の説話となっている。

このように第四八話の筋は、先行話を離れた独自なものになっており、しかもそれが「勝負」「競争」を明確に打ち出した、明らかに經典の勝劣を決するものになっていることは注目に価する。ここに、『法華經』と並ぶ『護國經典』として確固たる地位を与えられていた『最勝王經』への対抗意識を読み取ることは容易であろう。例えば国分寺が『最勝王經』、国分尼寺が『法華經』に依拠して建立されたように、この二經は表裏のように扱われる伝統があった。話中で『最

勝王經』持者の光勝は、『最勝王經』信仰の興隆ぶりを仔細に述べて法華持者を挑発するが、これは『驗記』（ひいては鎮源）が『最勝王經』信仰に対し抱いているライヴァル意識を逆説的に投影したものと読めよう。

ただし、このように本話において勝負・勝劣を強調する一方で、鎮源は法華持者の法勝に「如来所說何經不貴哉（如来が説いたもので、どの經が貴くないことがあるうか）」（『日思』五三四頁下）と語らせている。

これは法勝が『最勝王經』の最勝を述べ、法華の棄教を求めた（捨法花經奉持最勝王經、所以者何、是經甚深一切經中最第一）『日思』五三四頁下）ことへの応答である。『最勝王經』一經の絶対優位を主張する相手に対し、法蓮は、どの經も仏が説いており貴くないものはない、と反論するのである。

鎮源は『驗記』という『法華經』を主題とする説話集、つまり、特に『法華經』を称揚するための文献を編み、更には本話のごときあからさまな『法華經』優位譚を筆録している。この態度には一見、法勝の選択主義・一經至上主義と一脈通じるものがあるようにもみえる。そのような理解をされることを防ぐため、鎮源はこの「如来所說何經不貴哉」という台詞を法蓮に言わせているとも解せよう。かかる彼の態度は、法華を第一に置きながらも総合的・融和的な仏教を標榜する天台の僧として自然な言ではある。

なお、この鎮源の主張（経の優劣は本来決するべきではない）は、後続の『今昔物語集』（以下『今昔』）『元亨釈書』（以下『元亨』）において着目され、新たな展開を見ている。この両書は、行者対決説話たる『験記』第一七話を書承した際、比較されるのは經典そのものの優劣ではなく、その持者の性格である、という、原話にない解釈を示している。

「尚、人驕慢ノ心ヲバ可止キ也トナム語り伝ヘタルトヤ（なお、おごり高ぶる心を止めるべきと語り伝えられている）」

（『新大系』二七一頁）
「神靈矯其操履也。非経法之崇庫（神靈はその品行を質したのである。経法の尊卑ではない。）」（仏全一〇一、二八五頁下）

両書とも、『験記』のように特定經典の賛美を目的としたもので、こうした評語を付して行者対決説話を受容したことは必然的と言える。経の優劣は本来不問とすべきとする鎮源の主張は、特定宗派の色を出さない『今昔』『元亨』に継承され、そこにおいて明確に打ち出されたとと言える。

三 『涅槃経』、『観無量寿経』、『小阿弥陀経』（特に『観無量寿経』について）

以上、余経のうちで『法華経』との優劣が比較された經典類について見てきたが、次には、法華信仰との兼修が認めら

れた經典類について見ておきたい。具体的には、『涅槃経』および『観無量寿経』がこれに該当する。

まず第五十話「叡山西塔法寿法師」を見てみる。本話は、所持の『法華経』経巻を失う夢を見た僧侶・法寿の物語である。彼の持経が西方に飛び去ってしまい、途方に暮れていると老僧が現れ、持経は極楽に送り置かれており、これは往生の前触れであると告げる（所持法花経、是且送置極楽也。汝有兩三月、当得往生。」「日思」五三五頁下）、という夢告譚となっている。夢告を受けた法寿は様々な行業によつて往生に備えるが、その中に、『法華経』の書写・開講供養と合わせて、『涅槃経』『観無量寿経』などの大乘經典を見たとの記述がある（写法華経、請名德僧、開講供養……終日拝見涅槃経・観無量寿経等諸大乘経」「日思」五三五頁下—五三六頁上）。

この兼修方法については、持経が西方に飛び去り手元に無くなったこと（これがあくまで夢中のことに留まるのか、現実^{（9）}に持経が失われているのかについては不明であるにせよ）を受け、書写行によつて新たに経巻を作し、かつ、日課行としては、手元に残った他の經典（『涅槃経』『観無量寿経』等）を読む（見る）ようになった、という事情によるもの、と推定される。

更に、ここで挙げられている『観無量寿経』については、他に第八七話「信誓阿闍梨」にも言及がある。ここでは同経および『小阿弥陀経』と『法華経』との兼修が述べられている。

るが（「闡梨一生所誦、法華經數萬部、觀無量壽經、小阿彌陀經」『日思』五五二頁下）、ここで着目すべきは、同話にも前述の第五十話同様に、夢中にて飛行する『法華經』經卷を目にする、という挿話がある点である（『夢法華第六卷從空飛下』『日思』五五二頁上―下）。

このように、第五十話と第八七話には、「『觀無量壽經』の兼修」と「飛行する『法華經』經卷」という二種の共通モチーフがある。ここで想起され得るのは、『觀無量壽經』における、靈鷲山から王宮に赴く際、空を飛行する目連ら、またそれと伴に空間移動する釈尊の様相である。¹⁰ また明示されてはいないが、本經が説く阿弥陀の来迎も、飛來のイメージを持たれるものと言える。

このような『觀無量壽經』の「飛來する尊格」というモチーフと、同經の兼修を説く『驗記』第五十話・第八七話における「飛行する經卷」というモチーフはパラレルにあることが想定され、ここに尊格と經卷をパラレルに置き得るといふ、『驗記』の經卷信仰の有り様を見ることができよう。

四 まとめ

本論文では、『法華經』の靈驗を専門に扱う『驗記』において、敢えて『法華經』以外の經典が取り上げられる箇所に注目することで、同書を持つ經典信仰の様相を見てきた。そ

の結果、以下の知見を得た。

「行者対決説話」の形式によって靈驗の優劣が比較された般若經典・『華嚴經』・『最勝王經』については、それぞれ輕視・肯定・強い対抗意識という態度が見られた。しかしその上で、『驗記』は、「經典の優劣は本来示すべきではない」との主張をしており（第四八話）、更にはその主張が後続の『今昔』『元亨』に引き継がれていることが分かった。

続いて、法華信仰との兼修が説かれた『涅槃經』『觀無量壽經』『小阿彌陀經』について見たが、特にこのうち『觀無量壽經』については、同經に言及する二話（第五十話・第八七話）において共通して「飛行する『法華經』經卷」というモチーフが見られること、更にこのモチーフが同經に説かれる「飛來する尊格」のモチーフと関連する（パラレルにある）可能性を指摘し、本書における經卷信仰の一端についてその特性を示した。

- 1 『日思』七二三頁等参照。
- 2 松浦一九七三、九二頁等参照。
- 3 以上、岡田二〇一六参照。
- 4 以上、岡田二〇一六参照。
- 5 『日思』一七九頁頭注等参照。
- 6 末武一九七六、三四頁下―三五頁上。大曾根一九七八、一四頁上―一六頁上。

7 「公家名御齋会、講誦最勝。諸国亦名吉祥御願、講最勝王經。又薬師寺名最勝会、開講是經。公家所重、万民所仰」(『日思』五三四頁下)。

8 出典関係は『新大系』二六九頁脚注等に指摘。

9 なお彰考館本では「夙夜誦法華經念仏」とし、『法華經』を誦したとある(『日思』六二九頁下)。誦經は暗誦なので、手元の持經を必要としない。

10 「目乾連如鷹隼飛疾至王所」(大正一二、三四一上二)「爾時世尊在耆闍崛山、知草提希心之所念、即勅大目犍連及以阿難、從空而來。佛從耆闍崛山沒、於王宮出。」(大正一二、三四一中七—九)。

〈一次文献〉

『驗記』…『日本思想大系七 往生伝 法華驗記』井上光貞・大曾根章介編、岩波書店、一九七四(『日思』と略、一部の句点を読点に改めた)

『今昔』…池上洵一校注『新日本古典文学大系 三五』岩波書店、

一九九三(『新大系』と略)

『元亨』…『大日本仏教全書』一〇一、仏書刊行会、一九一三(仏全一〇一と略)

〈二次文献〉

大曾根章介「漢風の世界と国風の世界『法華驗記』をめぐって」

『中古文学』第二一号、一九七八

鎮源『法華驗記』における經典の扱い(岡田)

岡田文弘「鎮源『大日本国法華經驗記』の異類功德譚 第一〇六話「伊賀国報恩善男」を中心に」『インド哲学仏教学研究』第二一号、二〇一四

岡田文弘「行者対決説話 鎮源『法華驗記』第一七話および第三三話」『印度学仏教学研究』第六五卷第一号、二〇一六

末武恭子「法華驗記の先蹤」『国語と国文学』第五三卷第九号、一九七六

松浦貞俊「三宝絵詞と法華驗記「靈異記」引用に関する比較研究」『東洋研究』第三一号、一九七三

〈キーワード〉 仏教説話、經典信仰、『法華驗記』

(立正大学非常勤講師)